

# 洪水被害からの復活までの道のり

## ～平成28年台風第10号による小本川の氾濫と対応、ご支援について～



岩泉乳業株式会社 取締役副社長  
下道 勉 氏

## 1

### はじめに ～岩泉町と岩泉乳業について～

乳製品製造・販売業を営む岩泉乳業（株）は、岩手県岩泉町にある。岩泉町は県の中央部から東部に位置し、北上高地の山間部から、太平洋に接する広大な面積を有している。本州で最も広い面積の町である。東京 23 区と横浜市の面積を合わせた広さを有するが、その 93% が山林であり、自然豊かで水が綺麗なことから、「森と水のシンフォニー」という町のキャッチフレーズを持っている。



図-1 岩泉町位置図

太古の昔、海の底だった岩手県三陸海岸の北部一帯は、隆起して大地になった名残りで、石灰岩層の山が多い。当町も例外ではなく、町の中心部にウレイラ山というシンボルの石灰岩の山がそびえ立つ。日本三大鍾乳洞のひとつ「龍泉洞」がある町として、ご存知の方もあると思われる。

酪農の歴史は古く、明治 28 年にホルスタイン種が導入され、我国の酪農発祥の地とも言われている。

120 年余の牛飼いの歴史を刻んできたが、その急峻な山に囲まれた地形から、酪農は大型化や多頭化の経営にシフトする事ができず、高齢化も相まって年々酪農家戸数は減少している。

岩泉乳業（株）は、そんな沈滞ムードを打破しようと、町や酪農家が出資して 2004 年に設立された岩手県で最も新しい乳業メーカーである。

創業当初は、パステライズ殺菌（85℃ 15 分間保持）牛乳を主力商品としていたが、価格優先の市場では厳しい経営実績で、会社存続の岐路に立たされた。背水の陣で徹底してこだわった低温長時間発酵製法のヨーグルトを開発し、販売を始めた。その品質の良さが口コミで広がり現在は売上高の 90% をヨーグルトが占めている。

## 2 台風10号の直撃と対応状況

ヨーグルトの販売が順調に推移し、累積赤字も解消でき、まさにこれからという時、2016 年 8 月 30 日の夕刻、次第に風雨が強まる中、私は施錠準備をしながら、社員の駐車場の方向を気にしていた。北上山地の高原を源流として太平洋に向かって町の中心を西から東へ流れる小本川の水位が心配だったからである。小本川は会社の建物から概ね 100m 程、南を流れている。

その日、社長の山下は出張で盛岡に向かっていたが、その車中でラジオの情報を聞き、昼頃、私に電話をしてきた。台風 10 号が東北に上陸するようだ。社員はできるだけ早く帰すよ

うにとの指示だった。すぐに皆に伝え、早々に製造作業を切り上げ、会社の車両、フォークリフト、除雪ローダー等を万一に備え、社の敷地内でも川から遠く少しでも高いところへ避難させた。

16時を過ぎた頃から雨、風共にこの地で生まれ育った者には経験したことのない強烈なものとなった。小本川沿いの駐車場に上がった川の水もどんどん会社に向かって押し寄せてくるのが見えた。水の勢いもどんどん強くなり、会社の玄関付近が水で覆われるのに1時間程だった。

尋常ではない水位の状況に、私は危機感を覚え、その時に残っていた2人の社員と共に、事務所のOA機器を机の上に、また、高額な検査機器類がある検査室に入り、検査機器類をできるだけ高いところに移動する作業を始めた。作業して30分も経たない頃、玄関付近で大きな音が鳴り、向かってみると自動ドアのガラスが水圧に耐えきれず割れてしまい、そこから社屋の中に、ものすごい勢いで茶色く濁った水が流れ込んできていた。

建物の中に入り込んできた濁流には出口がない。行き場を失った水が玄関ホールや事務所の中で渦を巻き、まるで洗濯機の中の様であった。濁流が机や書庫などを洗濯物のごとく回すのである。水の恐ろしさ、怖さをつくづく感じた瞬間だった。この時には停電となったが、残った3人で2階に避難し、一夜を明かすことになる。

翌朝確認したところ、最終的には1階事務所の天井付近まで水の痕跡があった。当然、OA機器も、高価な検査機器も濁流にのまれてしまったのは言うまでもない。

本社工場には牛乳とヨーグルトの製造ラインがあり、隣接する第二工場、第三工場はヨーグルト専用工場であったが、この両工場の製造ライン全てが壊滅的な被害を受けた。ピーク時の

水位から翌朝夜明け時分には2.5m程水位は下がっていた。(写真-1)

洪水前の小本川両岸には自然のままに種子が流れ、芽を出し直径が30～50cmにもなるクルミやケヤキなどの大木が覆っていた。それが根こそぎ（まさに根っこから）倒木させられ、濁流に乗り上流から流れてきた。小本川流域の倒壊した家屋の多くは、こうした流れる大木により破壊されたと思われる。また、昔と違って最近の橋は、コンクリートや鉄骨で頑丈な作りになっている。流木が橋脚に引っ掛かりどんどん流れを止めてダムの様になり、溢れ出した水が橋の兩岸の道路伝いに暴れていた。

弊社は国道455号沿いにあるのだが、会社から300m程上流部に橋がある。この橋も例外ではなく、上記の様な現象が起きていた。弊社南側の小本川の氾濫ばかりを注意していたのだが、弊社北側の国道が川となり急激な水位の上昇をもたらした。いわば挟み撃ちに合い、逃げ場のない状況であった。

### 3 被害状況

台風の通過した翌朝は、現実と思えない風景を目の当たりにすることになった。

弊社は、乳製品製造・販売を生業とする会社だが、製造設備はもちろん、より小本川に近い第二・第三工場は建屋の被害も大きく、修復不可能な状態になった。(写真-2)

第二・第三工場へは本社工場で受入れした牛乳をパイプラインで送っていたが、そのパイプも寸断されてしまった。

工場内のステンレスタンクは殺菌タンク（2t）、調合タンク



写真-1 岩泉乳業の工場における翌朝の浸水状況



写真-2 第三工場建屋の被災状況



写真-3 本社の社屋横（国道445号との間）の被災状況。

(1t) 培養タンク (2t) 等全部で 14 基あった。それらはステンレスのパイプで繋がっており、一連の製造工程の流れとなる。横倒しにされたタンクは繋がれたパイプで次のタンクを引き倒す。まさに将棋倒しであった。

外観上大きな損傷がないように見えるタンクも、パイプのジョイント部分に変形したり割れたりして、全て使い物にならなかった。これをメーカーに運びこみ、ステンレスの打ち直し修理をして、再度運んでくると、新たに発注するより金額的に高くなってしまいう状況であった。

水が引いた後、工場内に堆積した泥は 20 ～ 30cm の深さだった。非常に粒子の細かい泥で、水分を含んでいると重く、水分が無くなるとコンクリートのよう固まって社員たちを苦しめた。最も効率よく泥を外に出すには、水をかけてドロドロにしてスコップで掻き出す事だった。

しかし、それには大量の水を必要とするが、幸い製造工場で



写真-4 泥で汚れたケースを小本川で洗浄する状況

あるが故、工場敷地内に井戸があった。タンクや配管を洗浄する水である。建設業者から工事現場用の大型発電機を借り、井戸水の汲み上げが可能となり、泥出し作業は一気にスピードが増した。電気と水が使えるようになった事で、高圧洗浄機が大活躍した。社員たちのスコップやローダーなどの重機も洗う事ができ、工場内から持ち出した製造機器類も付着した泥を簡単に落とす事が出来た。

また、社員たちを苦しめたのはそれだけではなかった。いたる所で道路が寸断されているため、通勤するのに何倍もの時間を要した事だった。

私は社長と一緒にう回路で片道 2 時間半の道を 3 日間通った。その後、廃線となっている岩泉線の線路を歩いた結果、1 時間で通勤できるようになった。

自宅が流出した社員が 3 名、床上まで濁流にのまれて家に住める状態ではなくなった社員も 5 名程いた。その社員も仮設住宅から通勤している姿を見ると弱音を吐いている場合ではなかった。台風が接近してきた頃に少しでも川から離れ、高い場所にと避難させた営業車や保冷車、フォークリフト、除雪ローダーも流され、廃車となった。軽保冷車にいたっては、500m 下流の林の中で半分土砂に埋まっていた。半月後にやっと発見される始末であった。

会社の隣にあるグループホームの施設では、平屋建ての建物であったため、9 名の方が犠牲となった。(写真-5)



写真-5 工場に隣接するグループホームの被災状況

町全体では 23 名の方が亡くなり、広大な面積の町内各地に点在する集落のほとんどで、生活道、橋、水道、電気が使えない状態になった。盛岡から当町に通じる国道 455 号も岩泉町内の 10 ヶ所程が土砂崩れや濁流に削られ崩落した。国道以外の町へ通じる県道も複数ヶ所で同様の原因で寸断された。(写真-6)

岩泉町は山に囲まれた町であり、往来のための道路が使えず、孤立した集落がいくつもあった。田畑も大きな被害となった。傾斜地の多い当地では、比較的平坦な土地は小本川沿いにある。水の便が良い事から川に近いところに水田を整備したのだ。大きく成長して秋の収穫に向かっていた田んぼの稲は、無残な姿で泥に埋まった。

山沿いの方には、畜産農家の牧草地やデントコーン畑があるが、ここは土砂崩れや砂利の流入の被害にあっている。



写真-6 小本川沿いの国道455号の被災状況

## 4 復活への決断から事業再開までの道のり

乳製品を造ることができなくなった乳業会社に復活への道はあるのだろうか？しかも、再建するとしても泥に埋まった工場の片付けから始めなければならない。更には、再建するには、また、この場所でいいのだろうか？復活するまでの間、社員は留まってくれるだろうか？など、色々と思ひ悩み、半ば諦めの結論を出そうとしている時に、被災のニュースが全国に流れ、岩泉ヨーグルトファンの皆さんやお取引先、更に全く縁のない個人・団体の皆さんから、励ましのお便りや義援金が届くようになった。そのひとつひとつが、心に染みて、泥だらけで作業をしている社員に大きな感動と前に向かって進む力を与えてくれた。

岩泉町は、広大な面積に対して人口は1万人を割っている過疎の町である。その町で50人もの若い社員が乳製品を造って給料を得、生活している。ここで会社の復活を諦めると、この社員の多くは職を求め町外へ転出してしまいうだろう。その結果、ますます過疎の町になってしまう。

ヨーグルトの製造はタッチパネル操作や、ストップウォッチを持ってバルブやコックの開閉、重量物の持ち運びもある。若い社員でも半年～1年では完全な製造技術習得は難しい。仮に再建できたとしても、この社員を一旦失ってしまうと、また一から技術を教え込まないといけなくなってしまふ。何より、この地で製造業の募集をしてもなかなか応募者がいない。

このような事から、社長の山下は思い切った決断をする。「なんとしても復活して、ヨーグルトを待っているお客様に1日でも早くお届けしよう。ヨーグルトは造れなくても給料は払い続ける。今のメンバーで再開を迎えよう。」と社員に呼び掛けた。

この事が乳業界で話題となり、茨城県の筑波乳業では9名を出向社員として受け入れをしてくれた。社員同様手厚く迎え入れていただき、会社再建にあたっての人件費の軽減となり、大変助かり深く感謝している。

復活への道のりの一歩目は、事務所や工場の中に入り込んだ泥を掻き出す事だった。本社屋の玄関は小本川の上流部に向いている事から、流木や倒壊家屋が流れつき、複雑に重なり玄関に突き刺さっていた。人手での撤去は難しく、重機を使って入

口を確保した。やっと中に入ることができたが、水分を含んだ重い泥を衛生面上、細かく仕切られている工場内から掻き出すのは重労働だった。重機を使う事のできない屋内での作業には、多くボランティアの方に来ていただいた。ボランティアの方は北海道や九州からも自費で参加してくれるのである。道路が寸断され、ここに来るまでにも多くの時間と体力を使っているはずなのにボランティアの皆さんの元気な作業姿勢に、私たちが元気までももらい助けられた。



写真-7 本社玄関の流木撤去状況

10月8日には安倍総理大臣が被害状況の視察にみえられ、社員を激励し、また再建への支援を約束していただいた。被災から2ヶ月程すると、建物内の泥出しと製造ラインの分解、搬出も終了した。あとは、専門業者に任せて解体・整地、そして新工場の建設を進めてもらう事になる。

岩泉乳業(株)は経営の苦しい時代、地域の皆さんから応援いただいて経営状況が改善され今に至っている。常々地域への感謝の気持ちは持っていた。しかし、具体的にお返しする場がなかったが、片づけが一段落した休業期間中をその機会ととらえ、弊社社員が、高齢世帯で片付けもままならない被災家屋の泥出しボランティアに入った。ボランティア活動は、2017年の3月まで続き、河川の清掃や田畑の瓦礫撤去、薪ストーブ用の薪割りと配達、支援物資の仕分け作業等多岐に渡り、社員の地域貢献から得られる学びも多かったと考えている。(写真-8)



写真-8 休業期間中のボランティア活動(薪割り)の様子

2017年4月以降は、新工場が完成して再開した時に備え、

社員研修を積極的に実施した。部署ごとにも勉強会を開き、個々のスキルアップを図る期間となった。仕事を続けながら、このような場を作るのはなかなか難しいが、全員が一同に会しての研修をたっぷりと時間をかけて実施することができた。転んでもただでは起きない精神である。

新工場建設あたっては、日配品の製造業にとって早期復活できるかどうか、再建後の取引を大きく左右することを建設業者の皆さんにも認識をしていただき、全面的な協力をいただいた。人員も優先的に投入してもらい休日でも工事が止まらない程であった。その甲斐あって、9月末には完成の運びとなり、10月には岩手県内にヨーグルトを出荷する事が出来た。

ヨーグルトを待ち望んでいたお客様から注文が殺到し、数量調整や納品日の変更をお願いする状況がしばらく続いた。11月からは県外へも出荷、12月からネットでの販売も再開した。

岩手県では岩泉乳業（株）の被災は大きなニュースとなり、その後の復活に向けた取り組みは、何度もテレビやラジオ、新聞で話題となった。

地元のテレビ局では、被災から復活までを取材し、ドキュメンタリー番組に仕上げ、BSの全国放送にもなった。

この様な事から、岩手県内では、被災前にお取引があった所からは、全て再開後も注文をいただき、被災前を上回る程の取引状況が今も続いている。

しかしながら、岩手県外の取引先においては、一旦、他社製品で埋まった売場の棚を再度引き戻す事は容易ではなく、今は、被災前の8割程度しか回復していない。もちろん、岩泉ヨーグルト復活の情報は徐々に全国の日配品担当者に知られて、新たな取引の話も舞い込んできている。被災前のレベルに戻るのにはそれ程遠くはないと思っている。

人気のあった岩泉ヨーグルトでさえこのような状況である。味の違いを差別化しにくい牛乳にいたっては、被災前の半分程度の販売量となっている。

奇跡と言われる程の短期間で復活したのだが、日配品業界の現実は厳しいものであった。

岩泉ヨーグルトの新工場は、被災前と同じ場所に再建した。



写真-9 2017年9月に完成した新工場

平地面積の少ない当町ではまとまった広い用地を確保するのは困難である。この地の小本川には高さ3m～4mの堤防が2年後に完成予定である。工場建設用地は、1.5m程のかさ上げをし、2階建てとした。1.5mと2階建てが万が一の時、人命を救ってくれると信じている。(写真-9,10)

## 5 おわりに ～被災経験を踏まえて～

突然の被災から1年1カ月ぶりに再開する事が出来たが、この間、多くの激励やボランティアの皆さんからの応援、そして多大な義援金をいただいた事に深く感謝している。再開後、ヨーグルトを造る社員、注文を受ける社員、梱包して発送をする社員の笑顔を見て、感謝の思いは倍増する。会社として一人も解雇せずに再開をできたことは大きな喜びであった。

今回の台風被害を誰が予想できたであろうか。台風は観測史上初めて東北（岩手県）に上陸した。町民誰もが全く経験した事のない雨が広大な町に降り続いた。町の面積の93%が急峻な山林である。降った雨は川に集中する。雨を抱き込んで大きな濁流となり、かつてない甚大な被害をもたらした。

この事を町民は経験した。その記録もした。予想することも可能になった。どこが危険でどこが安心か、どんな地形の場所に被害が出やすいか。100年に1度、1,000年に1度と言うが、同規模の災害が100年前に起きたから、次はまた100年後という事ではもちろん無い。最近の地球規模的な気候変動の状況を見ると、何時、どんな所でも岩泉町の台風災害のような事が起きてても不思議ではない。

私の稚拙な文章を読んでいただいた皆様には、決して油断せず、結果徒労に終わるとしても、万全の備えと避難をしていたきたい。

再建まで応援していただいた多くの皆様と、再開したヨーグルトをご愛顧いただいている皆様に紙面をお借りし、心から感謝を申し上げます。



写真-10 再建した新工場における生産の様子